

第164回くらしの植物苑観察会 2012年11月24日(土)

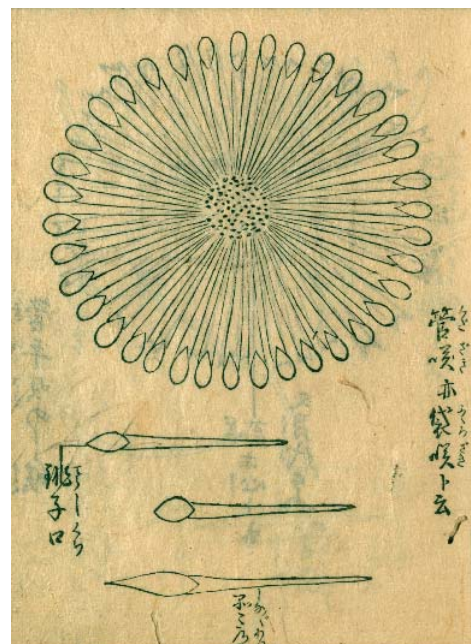
- 「菊花のかたち」 -

平野 恵 (東洋大学講師)

菊花の形は、千差万別。今回は、花卉の形や咲き方に注目して、江戸時代の呼び名と現代の花を比べてみましょう。

1 管咲の肥後菊

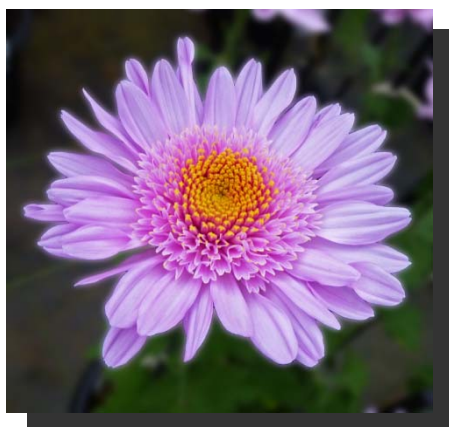
花卉の形が筒状になる咲き方を、江戸時代中期、正徳3(1713)年に刊行された栽培書『後の花』には、「管咲」または「袋咲」というとあり、またその先端を「銚子口」と呼ぶとあります。現在では花卉を管弁といいます。肥後菊・江戸菊・嵯峨菊・伊勢菊などたくさんの種類にあてはまり、弁の形での区別はしていません。しかし、花を説明するには、管咲で銚子口といえ、肥後菊のイメージに近かったのではないのでしょうか。



『後の花』  
(国立国会図書館ホームページから転載)

2 丁子咲の丁字菊

丁子菊は、頭花が丁子(クローブ)の花に似るので、江戸時代に丁子咲と呼ばれ、また蜂の巣にも似ているので、「蜂 窠」という呼び方もありました。頭花の部分が丸く盛り上がったものを「盛上丁子」、丁子が短いものを「躡丁子」、丁子が立ち上がらず伏したものを「僂丁子」などと名付け、様々なバリエーションを楽しんでいました。



『後の花』 (国立国会図書館ホームページから転載)

### 3 <sup>ねじ</sup>捻れ咲の江戸菊

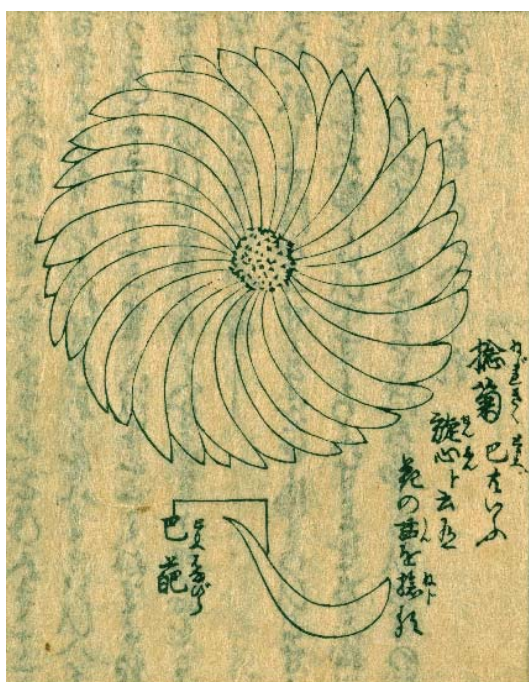
江戸菊の花弁には、平弁や匙弁、管弁もあります。江戸時代の咲き方にあてはめると、銚子口の管咲と茶匙咲などの複合形とでもいえるでしょうか。



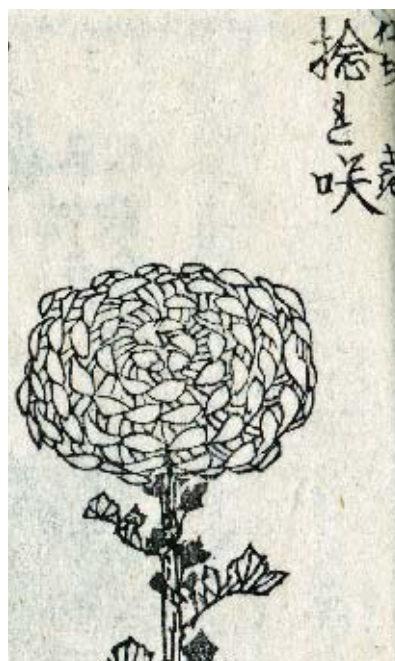
『後の花』（国立国会図書館ホームページから転載）



江戸時代に刊行された栽培書に、次第に花弁を抱えて狂い咲きをする「江戸菊」は記されません。しかし、よく似た形に、「<sup>ねじれぎく</sup>捻れ菊」「<sup>ねじ</sup>捻れ咲」として、花弁を抱えて旋回する咲き方が紹介されています。



『後の花』  
(国立国会図書館ホームページから転載)



『菊花檀養種』（個人蔵）

『後の花』は、「<sup>ともえ</sup>巴」ともいうとあり、平面的な旋回に描かれていますが、およそ130年後、弘化3（1846）年に刊行された『<sup>きくかだんやしないくさ</sup>菊花檀養種』では、花弁が立ち上がり、立体的に描かれています。

.....

**次回予告** 第165回くらしの植物苑観察会 2012年12月15日（土）  
「サザンカの品種とその文化史」 箱田 直紀（恵泉女学園大学名誉教授）  
13:30~15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要